

研究主題 「自己を見つめ、他者との関わりの中で よりよく生きようとする児童の育成」

～「考え、議論する」道徳授業の実践を通して～

川口市立幸町小学校

1 研究主題の設定理由

これからの未来を生きる児童は、激しい変化の止まることのない時代を生きることになる。児童一人一人が幸せや生きがいを感じながら生きると同時に、社会全体も幸せや豊かさを享受できるようにするために、学校教育において児童一人一人に道徳性を育むことは、より一層重要になるものと考えます。

また、本校では、「外国にルーツをもつ児童が多い」現状がある他、「友達の話を聴くことが苦手な児童がいる」という課題もあることから、児童も教師も楽しいと思える授業の中で、多様な考えを受け入れ、多様な個性に対して柔軟に接することの大切さに気付かせたい。

以上のことから、「考え、議論する道徳」授業の実践を要とし、『自己を見つめ、他者との関わりの中でよりよく生きようとする児童』を育成したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

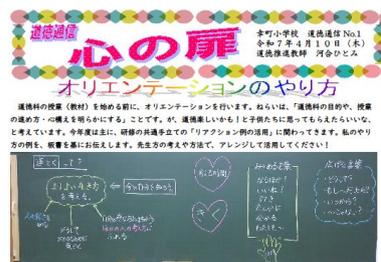
- (1) ねらいを明確化した授業展開を工夫することで、自己を見つめよりよく生きようとする児童を育成できるであろう。
- (2) 多様な価値観に触れられる授業展開を工夫すれば、意欲的に他者と関わりながらよりよく生きようとする児童を育成できるであろう。
- (3) 家庭・地域社会との連携を生かした環境を整備すれば、学校と三位一体となり一層充実した道徳教育を推進できるであろう。

3 研究の経過

時 期	内 容
6 月	・今年度の研修の共通理解 ・各部の年間計画の作成 ・校内道徳授業研究会（第2学年「がまんできなくて」）
7 月	・校内道徳授業研究会（第6学年「ブランコ乗りとピエロ」） 指導助言：十文字学園女子大学 教授 浅見哲也 氏
8 月	・校内理論研修 指導：聖徳大学名誉教授 吉本 恒幸 氏
9 月	・校内道徳授業研究会（第3学年「ぼくのボールだ」） ・校内理論研修 指導：十文字学園女子大学 教授 浅見哲也 氏
10 月	・校内道徳授業研究会（特別支援学級「三びきは友だち」） 指導助言：聖徳大学名誉教授 吉本 恒幸 氏
11 月	・校内道徳授業研究会（第1学年「かぼちゃのつる」）

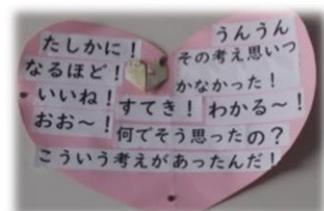
ウ. オリエンテーション

年度当初の道徳科オリエンテーションについて全教職員で共通理解を図った。「道徳科の授業とは、どのような活動をして、何を学ぶのか」を児童とともに考えるオリエンテーションを全学級で行った。



エ. その他

- ・「彩の国の道徳」教材を年間指導計画へ位置づけ
- ・児童が思考を整理するための「構造的な板書の工夫」
- ・児童が自分の思いや考えを表現しやすく、多様な考えに触れやすくするための「話し合いの場の工夫」
- ・話しやすい学級づくりのための「リアクション例」



(2) 環境整備について

ア. 道徳コーナー

各学級の道徳授業での取組を、道徳コーナーとして1階ホールに掲示した。また、学年の掲示板にも道徳科に関わりのある掲示をし、道徳科の授業と日常生活との結び付きを意識付けられるようにした。



イ. 他教科、学校行事との関わり

月1回の部会で、年間指導計画別葉の見直しを行った。別葉を定期的に見直すことにより、全教職員が他教科や学校行事との関わりを意識できるようにした。



ウ. 地域、家庭との関わり

全学級で道徳の授業公開を行った。また、学期に1回、道徳ノートに保護者のコメントをお願いした。学校だよりや掲示などで「家庭用 彩の国の道徳」を掲載し、地域や家庭へ、道徳教育への関心が高まるよう啓発している。

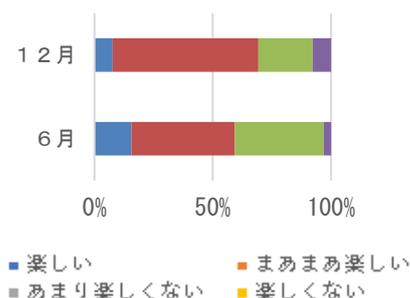
5 研究の成果と課題

(1) 成果

ア. 校内教職員アンケート調査から

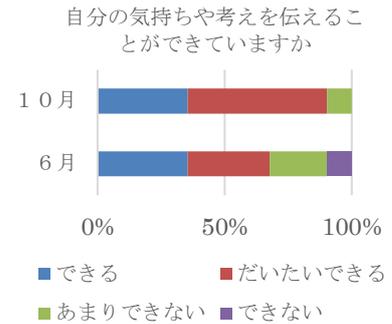
「道徳の授業は楽しいですか」「自信をもって道徳の授業をしていますか」の質問に対して、前向きな回答が増加した。道徳科の授業がイメージできるようになり、児童とともに意見を深める楽しさを感じられるようになった。一方で、ねらいを明確にし発問を吟味する難しさを感じており課題である。

道徳の授業は楽しいですか。



イ. 児童アンケート調査から

これまでに授業を行った学級、学年において、どの項目もおおむね伸びがみられた。アンケート項目については、研究の内容に合わせて見直していく予定である。



ウ. 各調査の実態について（R7実施）

埼玉県学力・学習状況調査

回答1, 2 の合計	自分にはよいところがあると思いますか			学校の友達は自分のよいところを認めてくれましたか		
	4年	5年	6年	4年	5年	6年
本校	80.9	83.9	77.4	96.0	96.7	92.1
県平均	80.7	79.1	77.2	94.2	90.0	94.8

非認知能力について「自己効力感」の数値は、4年生3.9（県平均3.8）、5年生3.7（県平均3.6）、6年生3.8（県平均3.6）と、どの学年も県平均より上回っていた。また、「学校の友達は自分のよいところを認めてくれましたか」の項目では、県平均を上回っている学年が多いが「自分にはよいところがあると思いますか」の項目では、県平均とほぼ同水準である。

「規律ある態度」アンケート調査

「よくできる」、 「だいたいできる」 の合計	やさしい言葉づかい			話を聞き発表をする		
	4年	5年 (前4年)	6年 (前5年)	4年	5年 (前4年)	6年 (前5年)
本校	84.9	89.0 (87.9)	86.1 (82.8)	81.7	83.9 (80.6)	80.9 (78.7)
県平均	85.5	86.9	89.4	83.8	83.2	83.7

本校の「規律ある態度」達成状況は、「整理整頓」の項目以外すべて80%を超えていた。本研究と特に関わる「やさしい言葉づかい」「話を聞き発表をする」では、前年度を上回ってはいるものの県平均には及ばなかった。

これらの調査項目について、今後の研究や日々の様々な授業や学校生活全体における指導や声かけを全教職員が意識し実践することを通して、次年度の変化に注目していきたい。

(2) 課題

- 児童の実態や課題を把握し、教師が内容項目を理解し本時の教材で何に気付かせたいか、学ばせたいか、ねらいを明確にすることについて研究を進めるほどその難しさを実感している。学校全体で研究を深めてねらいを明確にした授業を実現させるとともに、経験の浅い教員でも自信をもって授業ができるよう、板書や繰り返し発問の引き出しを増やしていきたい。
- 特別支援学級の児童や個別の支援が必要な児童が、自己を見つめ多様な考え方に触れられる授業ができるよう研究していきたい。